英訳百人一首の日本語訳とその教材性（下）
——国語科・伝統的な言語文化・古典の学習指導の充実に向けて——

竜田　徹

本稿は、国語科における「伝統的な言語文化」や古典の学習指導の充実に向けて、小学校、中学校、高等学校の国語教室において広く取り上げられている古典教材の一つである『小倉百人一首』の英訳版（以下、「英訳百人一首」と記す）とその日本語訳の教材価値について考察を加えたもので、「英訳百人一首の日本語訳とその教材性（上）—国語科・伝統的な言語文化・古典の学習指導の充実に向けて—」（『佐賀大国語教育』１；2017年３月）、「同（中）」（『佐賀大国語教育』２；2018年３月）の続稿である。

本研究では、英訳百人一首の意義と日本語訳を検討・作成し（上、前々稿）、「英訳百人一首の日本語訳」の教材性を明らかにし（中、前稿）、「英訳百人一首の日本語訳」を活用した学習指導例を提案する（下・本稿）。前々稿（上）及び前稿（中）の構成は次の通りである。

１．研究の背景と目的
２．古典の学習指導の現状
　2.1 古典の学習指導の課題
　2.2 古典の学習指導の方法
　2.3 教材『百人一首』の取り扱い
３．仮説と提案
　3.1 英訳百人一首に注目して
　3.2 英訳百人一首を日本語訳することを通して
４．英訳百人一首の日本語訳
　4.1 資料の概要
　4.2 英訳百人一首の日本語訳カタログ【資料】
　4.3 教材性の考察に向けて
５．英訳百人一首の日本語訳の教材性
　5.1 検討の方法
　5.2 語句の翻訳から誤訳の本質を問う—後徳大寺左大臣「郭公」歌—【表１】
　5.3 翻訳者の葛藤の現場に出会う—蝉丸「これやこの」歌—【表２】
　5.4 翻訳に立ち会う原作者に応える—中納言行平「立別れ」歌—【表３】
　5.5 教材性の考察のまとめ

１では、文部科学省や国立教育政策研究所が実施した調査の結果に基づき、中学生や高校生の「古典に親しむ態度」の育成に大きな課題があることを述べた。

２では、現在の古典の学習指導に見られる課題を

（１）世界の言語文化への視野が充分でないこと

（２）機械的・訓詁註釈的な指導から依然として脱却できないこと

（３）古典で学んだことが定着・発展しにくいこと

の三つに整理した。また、こうした課題の克服をめざしてさまざまな古典学習指導の方法が提案されてきており、『小倉百人一首』もその有効な教材の一つとして数多くの工夫された実践が試みられてきたものの、依然として「古典に親しむ態度」の結果が振るわないところに古典学習の課題の根深さ・むずかしさがあることを指摘した。

３では、このような現状を打開する方策の一つとして英訳百人一首の可能性を

（１）伝統的な言語文化の摑み直し論

（２）メタ言語能力の育成論

（３）古典の外国語訳が果たす媒介者的役割論

の三つの論に基づき提案し、英訳百人一首の教材化によって翻訳者や原作者の言語行為をめぐって思考したり、古典や伝統といった概念の本質を摑み直したり、日本語の特徴、古語と現代語のちがい、詩歌の特質、言語の可能性や限界についてメタ思考したりする古典学習をつくり出すことができると考察した。さらに、そうした成果を得るためには、英訳百人一首を日本語に再翻訳した基礎資料（英訳百人一首の日本語訳）の開発が求められることを指摘した。なぜなら、英訳百人一首を日本語訳する過程に学習の焦点を当てるため、英訳百人一首を国語教室で取り扱うことのハードルを低くするため、そして英訳百人一首の原典（英語）に立ち返る必然性を生み出すためである。

４では、以上の仮説と提案を踏まえ、下記①②の作品を対象として「英訳百人一首の日本語訳カタログ」を開発したうえで、翻訳作業に携わった大学生の所感に基づき、英訳百人一首の教材性の考察に向けた展望を述べた。

① Porter, William N. [1979] *"A Hundred Verses from Old Japan: a translation of the hyaku-nin-issyu"* Tuttle Publishing.
ポーター訳『古代日本の百の和歌　百人一首の翻訳』

② Rexroth, Kenneth [1955] *"One Hundred Poems from the Japanese"*, New Directions.
レックスロス訳『日本人からの百の詩』

５では、英訳百人一首の日本語訳の教材価値について後徳大寺左大臣「郭公」歌、蝉丸「これやこの」歌、中納言行平「立別れ」歌を取り上げて考察し、

（１）語句の翻訳から誤訳の本質を問う学習

（２）翻訳者の葛藤の現場に出会う学習

（３）翻訳に立ち会う原作者に応える学習

が生起する可能性を導いた。この三点は「英訳百人一首の日本語訳カタログ」に収められたそれぞれの和歌の教材性を分析する観点となるものである。

６．英訳百人一首とその日本語訳を活用した学習指導例

6.1 提案にあたって

英訳百人一首の日本語訳の教材価値を引き出すにはどのような学習指導を実践すればよいだろうか。『百人一首』が英訳されているということ自体、学習者にとっては新鮮で興味深く、関心を呼び起こす話題であると考えられる。教師も、教材研究を通してそれぞれの歌の趣旨や英訳の工夫について言語化できれば、一通り解説的に教えることはできるかもしれない。

しかし重要なことは、英訳百人一首（とその日本語訳）を通して原文和歌の世界に学習者自身が出会うということであり、翻訳者の英訳の工夫とその意図を学習者自身が見つけ出すということである。英訳の工夫や原作和歌とのずれを教師から一方的に教えられるだけでは――たとえば「英語の「pine」

には「待つ」「松」という意味があって、ちょうど掛詞になっているんだよ」と一方的に伝えられても——学習者にとっては「へぇ」という知識本位の表面的な感想で白けてしまい、言語文化や古典に親しむ学習としては成り立たないであろう。そこにはテキストが提示する問題との出会い、翻訳者や原作者との出会いがないからである。

したがって、英訳百人一首の日本語訳の教材性を引き出すためには、学習者による教材の検討作業や学習者同士による協働的学習を取り入れることで、「誤訳の本質」「翻訳者の葛藤」「原作者の心の揺れ」を学習者自らつかみ出すことのできる学習展開をとることが重要であると考える。

以上の考えのもと、本節では英訳百人一首の日本語訳を活用した学習指導例を二つ提案する。提案にあたっては、先行実践の成果と課題をできるだけ取り入れるとともに、各学校や各学級の実態に応じて柔軟に変形することのできることを旨とした。

6.2 同一和歌の英訳三首を読み比べる

学習指導例の一つ目は、同一和歌の英訳三首を読み比べる学習展開である。

3.1 で取り上げた柾木貴之[2012.3]では、高校１年生を対象に、松尾芭蕉の俳句「古池や蛙とびこむ水の音」の英訳三首をグループで日本語に訳し戻して比較する授業実践が検討されている。とくに「教材で３つの英訳を並列した点と、それに対応する班の訳を黒板に貼り出した点」[1]が効果的であったとし、それらを読み比べることで学習者にことばに関する気づきが生まれたこと、つまりメタ言語能力の育成に効果があったと考察されている。一方で課題としては、50 分１コマの授業では、各班の日本語訳を比較検討する時間が充分でなかったことが挙げられている。

柾木実践の成果と課題をふまえて学習指導過程を再構成すると、同一和歌の英訳三首を読み比べる展開が次の【表４】の通り考えられよう。

【表４】「英訳百人一首の日本語訳」を活用した学習指導例１

学習指導例１：同じ和歌の英訳三首を読み比べよう
目標：外国語訳を通して、『百人一首』への関心や理解を深める。 メタ言語能力を育成する。
教材とする和歌：【資料】「英訳百人一首の日本語訳カタログ」に示したポーター訳とレックスロス訳に加え、もう１冊の翻訳書（マックミラン訳[2009]、宮田明夫訳[1981]など）の三つの英訳原文がそろう和歌を選択する。たとえば、【表１】に示す後徳大寺左大臣「郭公」歌（81 番）。[2]
学習の進め方（45～50 分×２コマ）
＜第１時＞ １．学習課題を知る。 学習の目標と概要を説明した後、グループに分ける。たとえば次のように言う。「和歌は外国語に翻訳できると思いますか？　実は、すでに何人もの翻訳家が、『百人一首』を英語に翻訳してきました。今回の授業では、翻訳された歌からもとの和歌を読み直してみましょう。」 ２．元の歌が何か、三つの英訳から推測する。 各班に複数の英和辞典を準備しておく。百首から一首を特定するのは分量的に大変なので、予め対象とする歌の範囲を限定しておくとよい。また、教師が教室全体に向けて和歌の英単語を調べてみせる、「三首に共通する単語を調べてみよう」などと声かけをするなど、学習者の訳出の手助け

を行う。ここで時間を割きすぎないようにしたい。どの歌なのか分かったら、その和歌を何度か声に出して読む。

3．グループごとに英訳の一つを日本語に訳し、マジックで紙に書く。

グループの選択が同じ英訳和歌に集中しないように、くじ引きなどで分担してもよい。日本語の原文和歌の現代語訳を与えると、その訳に引きずられがちになり後の活動での発見が少なくなるので、できるだけ与えないようにする[3]。一首全体を訳すには時間的・労力的な負担が大きいうえ、一首全体の訳を完成させることがこの学習の目的ではないので、学習者の実態に応じて次のような配慮を行う。

・語釈をあらかじめ与える。

・1行目と2行目の訳をあらかじめ与え、その続きを考えさせる。

・訳し方のモデルとして、別の英訳百人一首の日本語訳例をいくつか示す。

4．グループで英訳をしてみて気付いたことを記入した上で発表する。

各自が書いたことをグループ内で共有してから、グループから1名ずつ教室全体に発表し、本時の学習を振り返っていく。次時は完成させた日本語訳を比較検討することを伝える。

＜第2時＞

5．3つの英訳を音読してリズムを味わう。

各語の発音、各行の音節数、脚韻など、英詩独特のリズムが感じられるように、まず教師が音読する。続けて学習者が声に出して読む。ここでは英語科担当教員やネイティブ・スピーカーの協力を得られるとよい。音読を聞いたり声に出したりして気付いたことを学習者が発表する時間をつくるのもよい。

6．各班の代表者が、訳した日本語を発表する。

日本語訳をマジックで書いた紙を黒板に掲示する。代表者はそれを見ながら発表する。訳していくときにグループで議論になったことや、苦労した部分などについて話すように手助けする。

7．他の英訳と比較し、気付いたことを記入した上で発表する。

まずは各自がワークシートに気付いたことを記入する。次に各自が書いたことをグループ内で共有する。最後にグループから1名ずつ教室全体に発表する。この場合、想定される反応は次のようなものである。

・「同じ部分に対して訳されている単語が違っています。たとえば……」

・「三つの英訳のなかでは英訳Aがいちばんいいと思います。なぜかというと……」

・「百人一首の翻訳なんて無理だと思ってたけど、意外とできるんだと驚きました」

・「英語を読みとくことで、和歌の意味がかえってよくわかりました」

・「日本語には……特徴があると思いました。これ英語には訳しにくいみたいです」

8．まとめ。学習者の振り返りの言葉に基づきながら、メタ言語能力の観点や、言語を越えた短詩形文学の普遍性、和歌の固有性などから価値づける。

この学習指導例は2時間で構成しているが、1時間目だけでも実践可能であろう。

上記では、三つの英訳の元の歌を学習者に推測させるようにしている。原文和歌を教師がはじめから提示する展開も考えられるが、推測活動を入れる場合に比べ、英詩訳を読み取ろうという学習者の態度を受け身にするかもしれない。英訳百人一首との出会いを豊かなものにしたい。

メタ言語能力の育成に向けては一回きりで終わらせず、教材和歌を替えて定期的に実践するとよい

だろう。そうすることで、『百人一首』に収められた歌一つ一つから学習者は何を学ぶのか、そうした意味での教材性を教師に見せてくれるはずである。そういう意味で、この学習指導例は「英訳百人一首の日本語訳」を活用する学習展開の基礎単位と位置づけることができる。さまざまな発展的学習がここから出発するであろう。

6.3 一首の原文と英訳を読み比べる

学習指導例２は、一首の原文と英訳を読み比べる学習展開である。

那須充英[2016.3]では、高校３年生を対象に、『百人一首』２番歌の持統天皇「春すぎて」歌とその英訳を比較する実践が行われている。指導目標は「自分の考えを相手に伝わるように話したり、書いたりできるように工夫すること」「英訳百人一首との違いを通じ、翻訳者の考えを想像すること」「英訳百人一首との違いを通じ、日本語の性質に気づくこと（「ことばへの気づき」を得ること）」[4]の三点であった。実践は３時間で行われ、「英訳を日本語訳にせよ」「英訳と元の歌を比べてどのような印象の違いがあるか」「翻訳者の工夫はどのようなところにあると思うか」「まとめの感想」の四つの活動が順に行われている。

先の柾木氏の実践との大きな違いは、和歌原文との比較にあたり、英訳を三通り取り上げるのでなー５５く、一首のみ取り上げていることである。したがって英訳の教材選択が重要になる。那須氏は「元歌には詠み込まれていない the mists（霞）を詠み込んでいること」や「和歌の中に直接詠まれていない解釈を詠み込んだ訳であること」[5]を理由として、マクミラン訳を選択している（【表５】（５－５）参照）。言い換えれば、翻訳和歌に、原文和歌との際立った違いが認められ、それが歌の解釈にも影響を及ぼすと判断されるものを選択しているといえる。

【表５】持統天皇「春すぎて」歌（２番）

和歌本文 （作者）	（５－１）春すぎて 夏来にけらし 白妙の ころもほすてふ あまのかぐ山 （持統天皇）[6]
現代語訳	（５－２）いつしか春も過ぎて夏が来たらしい。昔から夏が来ると白妙の衣を干しかけると言いつがれてきた、この天の香具山には、まっ白な夏の着物がほしかけてあることよ。[7]
① ポーター訳 本文	（５－３）THE spring has gone, the summer's come, And I can just descry The peak of Ama-no-kagu, Where angels of the sky Spread their white robes to dry.
①日本語訳	（５－４）春は過ぎ夏が来た。そして私は、天の香具山の頂上で空の天使たちが白い衣服を広げて乾かしているのを見つけた。
参考資料	○マクミラン，ピーター・ジェイ［2009］の英訳（５－５）とその日本語訳（５－６）[8] （５－５）Spring has passed. At last the mists have risen and white robes of summer are being aired

	on fragrant Mount Kagu— beloved of the gods. （５－６）春が過ぎ とうとう霞は立ち消え 夏の白い衣が風に当たっている 神に愛されている 天の香具山の上で

これにより、翻訳者の工夫を読み取る学習活動が必然性を伴ったものになる。どうして原文にはないこの語句を入れたのか。翻訳者の解釈を訳に反映させたのか。そこに翻訳者の営みを生き生きと想像することが求められるからである。実践の成果として示されている学習者の感想からも、たとえば「「robes of summer」や「fragrant Mount Kagu」など日本語の字面だけからは読みとれないことも、説明的に英語にして、読んだだけで意味がわかるように工夫されている」[9]という言葉にみられるように、教材選択と「翻訳者の工夫はどのようなところにあると思うか」等の問いかけが効果を上げているとみることができよう。

那須実践の成果をふまえて学習指導過程を再構成すると、一首の原文と英訳とを読み比べる展開は次の【表６】の通り考えることができる。

【表６】「英訳百人一首の日本語訳」を活用した学習指導例２

学習指導例２：和歌とその英訳を読み比べよう
目標：翻訳者の営みを想像する。 メタ言語能力を育成する。
教材とする和歌：【資料】「英訳百人一首の日本語訳カタログ」の日本語訳とその英詩原文のうち、英訳表現に顕著な特徴が認められる詩。たとえば、【表５】に示す持統天皇「春すぎて」歌や、【表２】に示す蝉丸「これやこの」歌（10 番）。ほかの翻訳書を用いることもできる。
学習の進め方（45～50 分×１コマ）
１．学習課題を知る。 学習の目標と概要を説明した後、グループに分ける。たとえば、次のように言う。「文学を外国語に翻訳した翻訳家のことを想像してみてください。簡単そうにみえる ‘I love you.’ にも、実は何通りもの訳が考えられるそうです。では、この和歌とこの英訳はどうでしょうか。どんなふうにちがうか、翻訳家はどんな工夫をしたか、考えてみましょう。」和歌と英訳を提示したあとに、それぞれを学習者と声に出して読む。 ２．グループごとに、次の三つの問いに基づき和歌と英訳を読み比べ、意見を出し合う。 各班に複数の英和辞典を準備しておく。三つの問いは次の通り。 ①英訳を日本語訳にせよ。 ②英訳と元の歌を比べてどのような印象の違いがあるか。 ③翻訳者の工夫はどのようなところにあると思うか。 ①をグループ全員での作業、②③を個別の作業として分けて実施するのもよい。また、問い①に関して、一首全体を訳すには時間的・労力的な負担が大きいうえ、一首全体の訳を完成させること

がこの学習の目的ではないので、学習者の実態に応じて次のような配慮を行う。
・通釈をあらかじめ与える。この場合も英和辞典は配布する。
・語釈をあらかじめ与える。
・１行目と２行目の訳をあらかじめ与え、その続きを考えさせる。
３．「問い③　翻訳者の工夫はどのようなところにあると思うか」に対する答えを、グループごとにマジックで紙に書く。
４．各班の代表者が、問い③の答えを発表する。
日本語訳をマジックで書いた紙を黒板に掲示する。代表者はそれを見ながら発表する。そのほか、グループで議論になったことなどについて話すように手助けする。
５．まとめ。学習者の発表の言葉に基づきながら、翻訳の可能性・不可能性や、メタ言語能力の観点などから価値づける。

本学習指導例の活動２には三つの活動を挙げているが、学習指導例１から展開する場合には、①の日本語訳を省略することができる。「１」での振り返りにおいて学習者の顕著な反応が見られた歌を「２」での教材とすれば、よりスムーズな導入となるだろう。

那須氏は実践を振り返って、「今回の比較で生徒たちが非常に強い関心を示したのは、英訳にしか見られない表現である「mists have risen」である」とし、英訳との比較が学習者の作品理解を深めたことを強調している[10]。英訳に際立つ特徴に着目することが同時に和歌への理解を深めることになるような教材を選択することが、学習指導例２の学習においては重要である。

6.4 学習指導例の考察のまとめ

以上、英訳百人一首の日本語訳の教材価値をふまえた学習指導例について、同一和歌の英訳三首を読み比べる展開と、和歌一首の英訳と原文を読み比べる展開の２例を提案した。これらを国語科の学習モジュールとして「伝統的な言語文化」の学習や古典学習に組み込むことは十分可能であろう。今後、二つの学習指導例に基づく実践成果を蓄積することにより、英訳百人一首とその日本語訳の教材性がさらに明らかになれば、さらなる学習指導例に開発につなげていくこともできるであろう。

７．研究の成果と展望

7.1 成果

本研究では、小学校・中学校・高等学校の国語科における「伝統的な言語文化」や古典の学習指導の充実に向けて、『小倉百人一首』の英訳版とその日本語訳の教材価値について考察してきた。

本研究の独自性は、古典学習の課題を（１）世界の言語文化への視野が充分でないこと、（２）機械的・訓詁註釈的な指導から依然として脱却できないこと、（３）古典で学んだことが定着・発展しにくいことの三点に見出し、その打開策を「英訳百人一首の日本語訳」の教材開発とそれを活用した授業開発に求めたところにある。

本研究の成果は、国語科学習における英訳百人一首の教材性として、（１）伝統的な言語文化の摑み直し、（２）メタ言語能力の育成、（３）古典の外国語訳が果たす媒介者的役割の三点を明らかにしたことである。また、これに基づき「英訳百人一首の日本語訳カタログ」を開発し、（１）語句の翻訳から誤訳の本質を問う学習、（２）翻訳者の葛藤の現場に出会う学習（３）翻訳に立ち会う原作者に応える学習指導のすがたを描き出したことである。

本研究の成果は、『百人一首』のみならず、ひろく古典教材全般を翻訳の視点から捉え直すことの意義を示している。これからの国語科における古典学習や言語文化の学習のあり方を探るにあたって、また、国語科の教科目標や教科内容をグローバルな視点から捉え直すうえで、本研究は一つの示唆を与えるものと思われる。

7.2 展望

本研究の結びに、「英訳百人一首の日本語訳」の教材性やそれを活用した学習指導例に関する今後の展望を３点指摘したい。

（１）翻訳と口語訳の差異に関する検討

１点目は、翻訳と口語訳の差異に関する検討である。『百人一首』の原文と現代語訳、翻訳者による翻訳作品とその日本語訳とを相互に検討するなかで、おそらく個々の学習者の内部では、「翻訳」や「口語訳」に関する既成概念が揺さぶられていくのだろうと思われる。「原文にある単語を忠実に置き換えていくだけでなく、ないものを加えたりあるものを削ったりしてもよいのか」という驚きや戸惑いが生まれていく。このこと自体は、言語文化の「伝統」を摑み直す上でもメタ言語能力の獲得という意味でも重要な経験であるにちがいない。しかしその一方で、教師は教室において「翻訳」や「口語訳」などの「訳」に関する用語をどれほど自覚的に使い分けているのだろうか。これに関し、翻訳家の鴻巣友季子氏は次のように述べている。

> 翻訳というのは、「英文和訳」をこなれた日本語に書きなおしたものではないのです。英文和訳をいくら洗練させても、翻訳にはなりません。英文和訳というのは、先生からすれば学校の授業で教えたことをみんなが正確に理解できているか確かめる「テスター」みたいなものですから、決まりきった手順があり、「正確に理解していますよ」ということを示すためには、その手順を踏んでみせる必要があります。そもそも翻訳と英文和訳は、成り立ちも目的も働きもちがう別物なのです。[11]

> みなさんに言っておきたいのは、原文に忠実で的確な翻訳を目指すのであれば、なおさらむしろ能動的に読む必要があるということです。受動的（機械的）な言葉の置き換えに終始しているかぎり、原文の核心には手が届きません。さっき、最初の一文を「それは、なにかがないことに気づいています」[12]と辞書の語義どおりに訳しましたが、何が言いたいのかちっともわからなかったでしょう。正確な訳文にも的確な訳文にもならない。[13]

そして鴻巣氏は「どこまで原文に書いてあるのか、どこからが書いてないのか、そこが非常に難しいところなんですよ。それを引き受けるのが、ある意味、能動性ということなんです」[14]と述べる。それは国語科がめざす読む学習の理想の一つでもあろう。言語文化の交渉過程の当事者として「伝統」の生成・更新の現場に立ち会うというのはそのような言語行為となるはずである。それだけに、「英文和訳」や「現代語訳」と「翻訳」との差異に関する理解が不十分であった場合には、古典学習における「現代語訳」の指導や英語学習における「英文和訳」の指導に支障をきたし、学習者に混乱をもたらす可能性がある。また、英訳百人一首を日本語に直す活動を行う場合、教師は学習者にどのように声をかけるだろうか。「翻訳してみよう」と言うのか、「和訳しよう」と言うのか、「訳してみよう」とするのか。適切な足場掛けがない状態で学習者が両者のちがいを明確につかむのは難しいであろう。

翻訳と口語訳の差異を問題化することが重要だと考える理由はこの点にある。鴻巣氏の『翻訳教室　はじめの一歩』には、絵本を「翻訳」する学習を通して小学６年生の児童たちがこの問題に取り組んだ過程が描かれており、教室で「翻訳」を扱う際の優れた教材になる可能性がある。また、英語科教育において「英文和訳」がどのような背景や目的をもっているかについては、鴻巣氏の指摘とは別に検討する必要がある。また、教科間の連携体制（後述）のなかで「訳」に関する理解を深めることも有効な方策の一つとなるだろう。

（２）翻訳をテーマとした単元開発

２点目は、翻訳をテーマとした単元開発である。短詩型文学教材とその翻訳や、『百人一首』以外の古典文学作品の翻訳を用いた学習指導との接続を図ること、と言い換えてもよい。具体的にはどのようなことか。北米における「ハイク指導」の実践的研究を進める中西一弘氏は、「北米の学校教育におけるその歴史（＝ハイクの歴史。引用者注）は 50 年以上に及び、現在は、詩教育の一環としてハイクの学習が定着している。このことは、俳句・ハイクが、我が国の学習者と海外の学習者とを結ぶ魅力的な教材となる可能性があることを示している」と述べ、俳句教材（ハイク教材）の創作・鑑賞を通した国際交流学習の実践的方策を考察している [15]。そこで営まれているのは、俳句を享受するのみならず、俳句を創造する学習であり、俳句を翻訳・交流する学習であり、さらには俳句とは何か、俳句の翻訳・交流とは何かを考える学習であるといえる。また、浜本純逸氏は「日本の古典」「東アジア三国（日本・中国・韓国）の古典」「世界の古典」の三つを関係づけて学ぶ「世界認識の履歴を学ぶ古典学習」を提案している [16]。「私たちは、「虚」の世界を創造することによって自然・社会・自己の真実なものを認識し、生を豊かにしてきた。各民族や各国民の「虚」による世界認識の総体が「世界文学」であり、その中で時間の洗礼を受けて、たえず人々の心に再生産され続けてきたものが古典である」（p. 11）と氏が述べるように、この古典学習は「世界文学」の視点に立って構想されている。このような教材群と言語文化享受・創造活動とによって成り立つ「翻訳単元」は、学習者の現在（時間・空間）から隔たりのあるテキストに分け入る学習指導と、学習者の現在からテキストが生み出される学習指導との両立を図り、学習者が世界市民の一人として言語とその役割を捉え直す学習となるだろう。古典カリキュラムの再構築という意味でも重要である。

（３）教科間の連携体制に関する検討

３点目は、教科間の連携体制に関する検討である。教科間の連携は、双方の教員の専門知識に基づく問いかけを生み出し、日本語文化圏と他言語文化圏の橋渡しを知的な学習機会とすることに貢献する。那須充英[2016. 3]の実践事例では、和歌の日本語訳の際に「英語科の教員を交えてディスカッションを行い、文法や英訳についてのポイントを話し合った。その中で、英語科の教員から「the mist」をどう訳せばよいかとの発問がなされた。初めは深く考えずに「霧」と訳している生徒も多かったが、この歌が春から夏にかけての歌であることが生徒から指摘され、「霧」よりも「霞」の方が訳として適切ではないかという意見が出た」等のやりとりが生まれ、歌ことばとしての「霧」や「霞」の理解へと発展したことが報告されている [17]。柾木貴之[2012. 3]にも同様の成果がみられる [18]。これらはいずれも意義深い成果であるといえる。しかし英語科と国語科の連携を強調するあまり、やり方によっては、古典テキストの表層面（日本語と外国語の表現の仕方）を比較することに学習が終始し、古典テキストを深く読み込む展開に届きにくくなることはないだろうか。国語科における「伝統的な言語文化」の学習や古典学習の場合には、「英語でも和歌を表現できることに驚いた」に類する気づきのみに留まっては不十分ともみられよう。他教科等との連携の内容やタイミングも当該授業の指導目標に照らして検討することが重要であろう。

以上、本研究の展望として「翻訳と口語訳の差異に関する検討」、「翻訳をテーマとした単元開発」、「教科間の連携体制に関する検討」を挙げてきた。これらは、「英訳百人一首の日本語訳とその教材性」を生かした授業実践における指導上の留意点となるとともに、本研究の成果を他領域や他教材に応用する際の論点になるものと考える。

８．参考引用文献

○石井明子[2018.5]「英語科との連携による「深い学び」実現に向けた学習過程―俳句と HAIKU を用いた授業実践を踏まえて―」『月刊国語教育研究』No.553、pp.22-27

○内藤一志[2013]「古典領域における実践研究」全国大学国語教育学会［編］『国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』学芸図書、pp.209-216

○教育課程部会国語ワーキンググループ（2015 年 11 月 19 日開催）の配付資料 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/068/siryo/__icsFiles/afieldfile/2015/12/11/1365189_1.pdf（2017 年 2 月 23 日確認）

○鴻巣友季子[2012]『翻訳教室　はじめの一歩』筑摩書房

○鴻巣友季子[2018]『翻訳ってなんだろう？　あの名作を訳してみる』筑摩書房

○島津忠夫［訳注］[2003]『新版　百人一首』角川書店

○鈴木日出男[1990]『百人一首』筑摩書房

○世羅博昭[2011]「古典教育」日本国語教育学会［編］『国語教育総合事典』朝倉書店、pp.146-157

○世羅博昭[2002]「古典領域における実践研究の成果と展望」全国大学国語教育学会［編］『国語科教育学研究の成果と展望』明治図書、pp.287-292

○竹村信治[2012.3]「〝伝統的な言語文化〟の摑み直し（上）―『伊勢物語』初段、『今昔物語集』「馬盗人」などを例に―」『国語教育研究』第 53 号、pp.54-62

○竹村信治[2012.3]「〝伝統的な言語文化〟の摑み直し（下）―『伊勢物語』初段、『今昔物語集』「馬盗人」などを例に―」『論叢 国語教育学』通巻 8 号、pp.20-31

○竹村信治[2013.7]「古文学習の課題―学力評価問題パイロット調査から―（上）」『論叢 国語教育学』通巻 9 号、pp.65-75

○竹村信治[2014.3]「古文学習の課題―学力評価問題パイロット調査から―（中）」『国語教育研究』第 55 号、pp.55-66

○竹村信治[2014.7]「古文学習の課題―学力評価問題パイロット調査から―（下）」『論叢 国語教育学』通巻 10 号、pp.29-46

○髙松美紀[2018.3]「世界俳句の検討による伝統的な言語文化の相対化―国際バカロレア TOK の視点を取り入れて―」『国語科教育』第 83 集、pp.42-50

○俵万智／ジャック・スタム［訳］[1988]『英語対訳版サラダ記念日』河出書房

○俵万智[1999]『言葉の虫めがね』角川書店

○中央教育審議会[2008.1]「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」

○中央教育審議会[2016.12]「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」

○中西淳[2009.9]「北米におけるハイク指導の実践的研究」『国語科教育』第 66 集、pp.59-66

○中西淳[2014.9]「北米におけるハイクワークショップの有用性―国際交流を実りあるものとするた

めに―」『国語科教育』第 76 集、pp. 55-62
○中西淳[2016. 9]「俳句による国際交流の実践的研究」『国語科教育』第 80 集、pp. 71-78
○中村和弘[2017. 1]「国語教育・外国語教育の連携の意義と実践の可能性」『月刊国語教育研究』No. 537、pp. 28-31
○那須充英[2016. 3]「ことばへの気づきを育てる『百人一首』の指導―英訳百人一首との比較を通じて―」『横浜国大国語研究』34 巻、pp. 48-59
○二田貴広[2007. 12]「教育の場でどう扱われているか」『国文学　解釈と教材の研究』(特集　百人一首のなぞ) 第 52 巻 16 号臨時号、pp. 164-169
○北條文緒[2004]『翻訳と異文化　原作との〈ずれ〉が語るもの』みすず書房
○牧野成一[2008]『日本語を翻訳するということ』中央公論新社
○柾木貴之[2012. 3]「国語科が英語科と連携する意義について―「国語科と英語科のティーム・ティーチング」を例に―」『国語科教育』第 71 集、pp. 43-47
○柾木貴之[2017. 3]「英語学習に生きる国語の力とは―国語教育と英語教育の連携を目指して―」『月刊国語教育研究』No. 539、pp. 43-47
○マックミラン，ピーター／佐々田雅子［訳］[2009]『英詩訳・百人一首　香り立つやまとごころ』集英社
○マクミラン，ピーター・ジェイ［英詩・監修］[2015]『英語でよみとく百人一首大図鑑』ほるぷ出版
○宮田明夫[1981]『英訳　小倉百人一首』大阪教育図書
○浜本純逸[2008]「世界認識の履歴を学ぶ古典学習」記念論文集編集委員会［編］『浜本純逸先生退任記念論文集　国語教育を国際社会へひらく』溪水社、pp. 1-11
○吉海直人[2008]『だれも知らなかった〈百人一首〉』春秋社
○吉海直人[2010]『図説　地図と由来でよくわかる！　百人一首』青春出版社
○渡辺春美[2010]「「古典」の授業実践史―戦後の古典教育の展開と授業実践に学ぶ―」浜本純逸［監修］『文学の授業づくりハンドブック第４巻―授業実践史をふまえて―中・高等学校編』溪水社、pp. 226-251
○Porter, William N. [1979] *"A Hundred Verses from Old Japan: a translation of the hyaku-nin-issyu"*, Tuttle Publishing.
○Rexroth, Kenneth [1955] *"One Hundred Poems from the Japanese"*, New Directions.

【注】

1　柾木貴之[2012. 3]、p. 48。
2　【資料】は前々稿（上）を、【表１】【表２】【表３】は前稿（注）を参照。
3　注１に同じ、p, 46。
4　那須充英[2016. 3]、p. 56。
5　同上。
6　島津忠夫［訳注］[2003]、p. 16。
7　同上。
8　マクミラン，ピーター・ジェイ［英詩・監修］[2015]、p. 18。
9　注４に同じ、p. 52。

10　注４に同じ、pp. 50-51。

11　鴻巣友季子[2012]、p. 47。

12　Shel Silverstein *"THE MISSING PIECE"* の冒頭の一文、'It was missing a piece.' の訳。

13　注 11 に同じ、pp. 91-92。

14　注 11 に同じ、p. 189。

15　中西一弘[2014. 9]、p. 55。

16　浜本純逸[2008]、pp. 9-10。浜本氏は「日本の古典」「東アジア三国（日本・中国・韓国）の古典」「世界の古典」を合わせて「古典教材の三層」と読んでいる（p. 9)。

17　注４に同じ、pp. 34-35。

18　「国語教員・英語教員が互いの専門知識を生かし、両教科を結び付けることで、生徒が「学びの共通性」を意識するきっかけとなる」(p. 49) と同論考で指摘されている。

【付記】

本稿を成すにあたり、佐賀大学文化教育学部後期専門科目「専門教育外国語」(2014 年度～2016 年度開講）における受講者との議論を参考した。受講者の皆様に、厚く御礼申し上げる次第である。

（本学准教授）